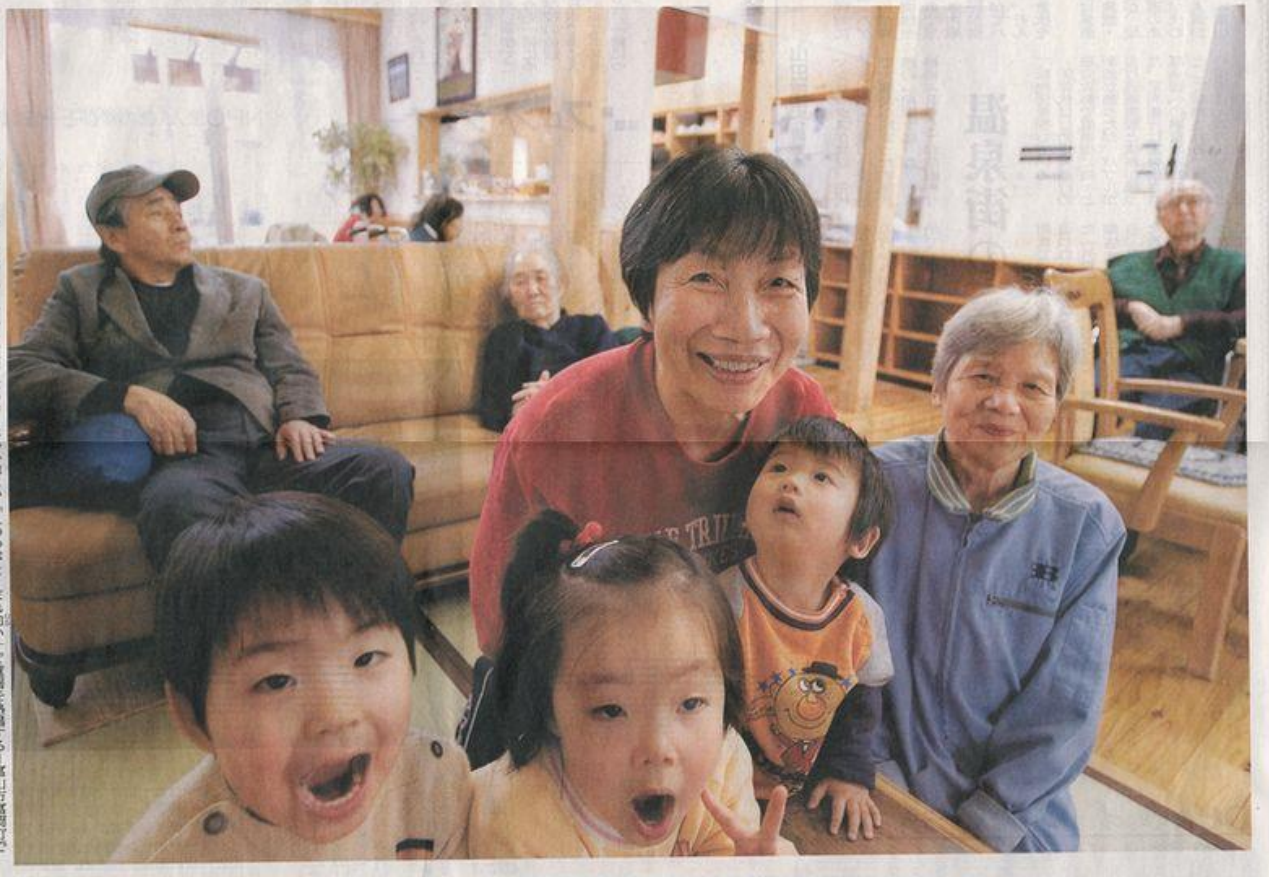
朝日新聞　2007年(平成19年)4月14日　土曜日

NPO法人「このゆびとーまれ」理事長

惣万佳代子(そうまんかよこ)さん(55歳)

フロントランナー Front Runner



子どもたちは惣万さんが大好き。優しいおばあちゃんも一緒。木の香りが心地よい「このゆびとーまれ向い」で童謡を熱唱する＝富山市富岡町で

制度の枠超え みんな預かる

富山市富岡町の住宅地にあるデイケアハウス「このゆびとーまれ」には毎日、お年寄りや障害のある人、子どもが20～30人集まってくる。

新聞を読む人、料理の下ごしらえをする人、子どもをあやす人――だれが利用者でだれが職員なのか一見よくわからない。それぞれが自分にできることをし、助け合いながらくつろいでいる。まるで家族のように。

ここでは、介護の必要なお年寄りから、元気な赤ちゃんまで「このゆびとーまった」人は断らない。みんな預かる。入浴や食事の介助など必要なケアはするが、スケジュールはなし。「自分の居場所と人間関係ができれば、職員はちょっとかかわるだけでいいんです」。惣万さんの「戦友」、副理事長の西村和美さん(54)がほほえむ。

■■

この当たり前の風景は、高齢者、障害者、児童と厳しく線を引く福祉の世界では相当型破りなものだった。

しかし、惣万さんら元ベテラン看護師3人は、「だれでも必要なときに必要なだけ利用できる」施設づくりを目指した。

「高齢者が障害者のどちらかに絞れば補助金が出る」との市の説得も一蹴した。周囲の反対を押し切り、退職金で一戸建てを購入。93年7月、「このゆびとーまれ」を開いた。

制度の枠を取り払ったら、温かくて生き生きした空間ができた。ここを訪れた人は、ここですごす人たちとこの人の大きな笑顔に魅せられる。こういう施設が身近にあれば――共感は、あっという間に広がった。多額の寄付が寄せられ、富山県内には同様の施設が次々誕生した。

そんな「市民」を背に、大晋商の富山弁で通ること4年。県は規制緩和の仕組みを超え、柔軟な補助事業を打ち出し、支援を始めた。惣万さんらと県との協調は画期的な「富山型デイサービス」として実り、今春までに、県内の施設は48に増えた。

■■

「制度を壊す側の惣万さんと壊される側の行政。惣万さんの事業にあふれる理念は行政側をもひきつけ、味方にしてしまう」と逆野隆之・日本福祉大教授は言う。確かに、行政にも惣万ファンは多い。厚生労働省の石黒秀喜参事官は「デカい声と、ものおじしない明るい気性。お酒を飲んで福祉について語り合う楽しい仲間」と話す。

03年秋には「富山型デイサービス推進特区」が認定され「富山型」は15県余りに広がった。滋賀、佐賀県など「富山型」を独自に推進する自治体も増えている。06年10月には、特区を申請しなくても、全国の障害者福祉施設と障害児者施設で相互利用が可能になった。

「見とってねー」。3歳の男の子が、ソファから飛び降りると、認知症のおばあちゃんの手がテーブルの角を覆う。子どもたちの動きを、動けないお年寄りが目で追う。自分の孫だと思って、遊んでやり、しかったりほめたりする人もいる。十分にかまってもらった子どもたちは落ち着き、優しさが育つ。

ソファで、おばあちゃんがうたたねを始めた。「みんな、リラックスしとろう?」。ふっと観音様の顔になった。

文・魚住ゆかり
写真・浅野哲司

b2面にインタビュー